



雨乃アリア
illustration ユウサギ

痴女装
あおいの
イキすぎた
夏休み

トレニア文庫

痴女装あおいのイキすぎた夏休み

雨乃アリア

目次

第一章	倒錯のひとり遊び	7
第二章	初めての女装露出散歩	25
第三章	白昼露出はビキニ女装で	59
第四章	素顔のコスプレ絶頂撮影会	106
第五章	後悔、そして……	146

表紙
ユウサギ

第一章 倒錯のひとり遊び

画面の中で、かわいらしいミニ丈のワンピースをまとった自分が、曲に合わせてばたばたとステップを踏んでいる。

ダンスと呼ぶにはおこがましいような、つたない踊り。

でも、そんなことは当の碧生あおいにとっても、この動画を見ているような人たちにとっても、どうだっていいのだ。

《新作きてたー！》

《あおいちゃん相変わらず脚きれいで舐めたい》

《こんなかわいい子が女の子のはずがない！》

アップロードしてほどなく、すぐにそんなコメントがいくつも動画につけられる。

画面の中でワンピースの裾がきわどく翻り、白い太腿の付け根がちらちらと覗いているのを見て、碧生はそれが自分の女装姿だというのに、痛いくらいに股間を硬くしていた。

「みんな待っててくれたんだ、ぼくの恥ずかしい動画……」

動画と同じワンピースのやわらかな生地越しに勃起を握りしめ、息を湿らせて画面に顔を近づける。

《今夜のオカズはこれに決定》

《あおいちちゃんのち×こだったら俺しゃぶれるわ》

《撮影イベントとかやってくれないかなあ、ヌードありで》

あからさまに性の対象として見られているのを実感すると、腫れ上がったペニスがびくんびくんと脈を打って、ワンピースにいやらしい染みを浮かび上がらせてしまふ。

「もうだめ……」

碧生は足をもつれさせながら部屋の片隅に立てかけた姿見へ向かい、勃起を押しさえ込んでいた女もののショーツを脱ぎ捨てた。

「んあつ」

自由になった男根が勢いよく跳ね上がって、たくさんのフリルがついたワンピースには似つかわしくない、いびつなテントが張り出した。布地が引っぱられて裾が持ち上がり、陰毛を処理してつるつるになった陰囊がちらりと覗く。

「うわっ、すっごくやらしい……」

じっとり汗ばんだ指で薄布の裾からペニスを引っぱり出し、ゆっくりと擦り始めた。先端からはすでに大量の先走りがあふれ出していて、手を上下させるたびに粘っこい糸を長く伸ばしていく。

「ふあつ、ああ……」

碧生は上ずった声を漏らしながら、鏡の中の自分をうっとりで見つめた。

だらしなく垂れ下がった眉尻に、うっすらと潤みを帯びた大きな瞳。興奮のあまり半笑いのようになっている唇の端からはヨダレがこぼれて、顎まで濡らしてしまっている。うっすらとメイクを施してウィッグを装着しているというのもあるけれど、それにも増して、このとろけきった表情が自分をより女らしく見せるのに一役買っている気がする。

（自分に興奮するなんて変態もいいとこだけど、こんなにエッチでかわいいんだもん……しようがないよね……）

汗のにじんだ細い首筋やくつきりと浮き出した鎖骨、あらわな撫で肩をウィッグのやわらかな毛先がくすぐり、碧生の性感を高めていく。

「あぁっ……ぼくの脚、やっぱいいやらしい……」

男にしてはサイズの小さな足から、引き締まったつややかなふくらはぎ、ほんのりピンクに染まった膝小僧を経て、ややふつくらと肉をつけた、いかにもやわらかなような太腿へと、碧生はねつとりと視線を這わせていった。ムダ毛をきれいに処理した真っ白な肌と長くしなやかな脚線に、手にした欲棒がひとときわ硬く、熱くなる。もじもじと内腿を擦り合わせると陰囊が圧迫されて、きゅつとわずかに持ち上がった。

「んぁっ、あぁっ……気持ちいいよぉ……」

高い声を漏らし、腰をゆらめかせる。

手のひらを汚す我慢汁は勢いよく勃起をしごいているせいですっかり泡立ち、いやらしい水音を静かな部屋に響かせている。ぬめりによって摩擦はいっそう苛烈な

ものとなり、お尻のあたりにわだかまっていた射精感が、どんどん勃起へとせり上がってきているのがわかった。

「はううっ……こ、こっちも……」

碧生は空いているほうの手をワンピースへ差し入れて、乳首に指を伸ばした。すでにぷっくりと張りをたたえていた突起を、ちろちろと指先でくすぐる。

「んふうっ……乳首イイっ、おち×ちに響いちやうっ……」

さんざんオナニーの際にいじりまくったせいで小豆くらいの大ささまで恥ずかしく成長してしまった乳首から、ぴりぴりと甘いしびれが勃起へと送り込まれる。最初は興味本位で刺激し始めたそこは、もはや碧生にとって欠かせない快感のスイッチと化していて、いじるのといじらないのでは絶頂時の快感も段違いに異なる。だから、これ以上は肥大化させたくないと思いつつも、碧生はびんびんに尖った乳首をこねくり回さずにはいられないのだ。

「くあっ、あうっ……ひっ、あっ、あっ……」

みつともなく膨張した牡乳首を親指と人差し指で捉え、こりこりと強めに捻り転がす。いじっているのは左だけなのに、右の乳首も快楽を欲しがって硬く張りつめ

てしまっているらしく、ワンピースの裏地が擦れるだけで甘美な疼きが湧き起こつた。

「ふあああつ……」

もどかしい快感に、どくんっ、どくんっ、と肉竿が脈打ち、だらだらと先走り垂れ流す。はしたない牡器官の訴えを受けて手の動きをいっそう速めかけるが、そこであえて、碧生はいったんペニスを解放した。

(すぐ出しちゃつたらもつたいない……)

今度はがむしゃらに擦り立てるのではなく、親指と人差し指で形作つた輪を先端に通し、カリ首だけを狙って擦過させていく。

「ふはっ、はっ、ああっ、んひっ……」

敏感な笠への集中的な刺激に、ひくんっ、ひくんっ、と腰が反応する。とても気持ちいいのに、すぐにはイキそうもない——つまり強い快感が長く持続するというわけで、碧生は自分に対してそうやって一種の「焦らし」を与えるのが好きだった。

しゅっ、しゅっ、しゅっ、しゅっ、しゅっ、しゅっ……。

亀頭の半ばから、つんといやらしく突き出している縁の部分にかけてを、力を込めすぎないように注意を払いつつ、指の輪を微妙な加減で往復させていく。乾いた摩擦によって皮膚の触れ合う箇所から熱が生じ、やがてそれは勃起全体を包み込んでいった。

「あひっ、ひっ、ふっ、んあっ、はうっ……」

そのうちに先端からカウパーがこぼれ出し、亀頭はぬらぬらした粘りをまとい始める。

くちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、くちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……。

ぬめりを得てなめらかな動きが可能になると、さっきより少し力を強めて、つぼっ、つぼっ、とカリ首に指が引つかかるように輪を上下させる。指と亀頭との接触がより濃密なものになって、もどかしさに疼いていた敏感な笠が、待ち望んでいた刺激に歓喜し、膨張した。

「はあっ、はっ、はっ、ふっ、ふううっ……」

鏡に映る自分の顔を見ながら、碧生はどんどん指の動きを速めていく。

(とろんとしちゃって、すっごくエッチな顔……)

頬はチークを差したように紅潮し、唇はグロスを塗ったみたいにつやめいている。薄いメイクをしただけに妙な色香が漂っているのは、快樂が淫らな化粧を施してくれているおかげだろう。

うっとりとして細められて潤みをまとった自身の瞳をじっと見つめ、鏡に顔を近づけて、ちゅつと口づけてみる。女装した自分とキスをするというナルシスティックな行為が背徳感を呼び起こし、びくんと肉茎が手の中で跳ね上がった。

「んちゅつ、ちゅぱっ……んううつ、もう出そう……」

鏡から離れて、再び全身を姿見に映し出す。白い太腿とは不釣り合いな赤黒い怒張を、碧生はいよいよ強く激しく、全体にわたって擦り立て始めた。

「ああっ、あつ、すごいっ、気持ちいいよおっ……♡」

ちゅくつ、ちゅくつ、と勢いよくしごきながら、左の指先で乳首を素早く弾き、転がして、きゅうつとつねり上げる。

「出るっ、出る出るうっ……あつ、あつ、ああああつ——」

ぐんつ、と腰を反り返らせて、碧生は鏡の向こうの自分を見つめた。

「んつくううううっ♡」

びゆくつ、びゆつ、びゆるるつ——！

陰囊から駆けのぼってきた精液が、尿道口を割り開いて射出されていく。

「あつ、んあつ、はあああつ♥」

放たれた生臭い精塊は鏡面に降りかかり、向こう側で射精の快感にだらしく緩んでいる碧生の顔を、びんと尖った乳首が恥ずかしく主張している平らな胸を、ひらひらの愛らしいワンピースを、精を吐き出し続けている手の中の肉竿を、そしてふるふるとわなないている生白い太腿を、黄ばみがかった白で淫らに汚していった。

「はあつ、はあつ、はあああつ♥んっ……ちゅっ、ちゅぱっ、れろっ……」

精をすべて絞り出すと、ぺたんと鏡の前に女の子座りをして、鏡に付着した白濁を舌で舐め取っていく。向こう側の自分とキスをしながら味わう自身のザーメンの味は、いつだって甘美で、たまらない充足感を碧生にもたらしにくれた。

「んくっ……ん、おいし……♥」

艶めかしく微笑む自分と視線を交わし合ってから、碧生はのろのろと自慰の後処理を始めた。



甘木碧生あまきが初めて女装をした——いや、させられたのは、高校三年生するときだった。

学園祭で催された女装コンテストに、顔も体系も中性的だからという理由で無理やり担ぎ出されたのだ。

ずっと東北の田舎で暮らしていた碧生が「女装」と聞いて想像したのは、どぎつい化粧をして青髭を浮かび上がらせた、あまりにも戯画化された「オカマ」のイメージだった。だから、参加者が少ないからと強制的に会場へ引っぱられていったときは、とにもかくにも拒んだのを覚えている。

でも、非力でおとなしい碧生のような男子など、団結した女子たちにとっては赤子のようなものである。嫌がって逃げようとしても簡単に押さえつけられ、あれよあれよという間にメイクを施され、女子の制服を着せられてしまっていた。全裸に

剥かれて小さなショーツまで穿かされてしまい、そのときのトラウマで碧生はいまでも女子が苦手だった。

そうして強引に女装させられた碧生だったが、鏡に映った自分を見た瞬間、心の中でなにかが弾けた。周りの女子たちとは違った、小さな花のようにかよわく愛らしい女の子の姿が、そこにはあった。一瞬で心を奪われ、しばらく目が離せないほどだった。ひと目惚れしてしまったといってもいいくらい、胸がときめいた。

コンテストであっさり優勝してしまったことで、自分がかわいいのだという自信を碧生は強く抱いた。参加者が少なかつたというのはあるにしても、それでもほぼ全部の票が碧生に集まったのだから、単なるうぬぼれではないと思っている。

それまでは女子からまったくモテず、男子たちからもものけ者にされることが多かった碧生は、そんなふうになんか注目されるだけで、気持ちが昂るのを抑えられなかつた。

クラスの男子たちには、おもしろがってスカートをめくられたり、お尻を揉まれたり、ミニスカートから伸びる太腿をしつこく撫でられたりもした。同性からそんなふうに触れられるのは嫌なはずなのに、自分がみんなの中心にいるのだと実感す

ると妙にうれしくて、気持ちよくなって、碧生はショーツの内側を少しばかりこわばらせてしまった。

その夜、学園祭でのことを思い出しながら興じたオナニーは人生でもっとも大きな快感を碧生にもたらし、それからというもの、また女装してかわいくなりたい、という願望が日に日にのつっていったのだった。

都内の大学への進学を機に実家を出るとき、碧生の頭は女装のことでいっぱいだった。これで思う存分に女装できる。女装してオナニーができる。そんな期待に股間をふくらませ、新生活が始まったのだが――。

初めての都会、初めての大学、初めてのひとり暮らし。

初めてづくしの毎日で、しばらくはとても女装のことなど考える余裕がなかった。思っていたのと違う現実に不満はあったが、とにかくまずは環境に慣れないことには始まらないので、必死に勉強して、炊事や洗濯といった家事もこなして、生活を整えることに腐心した。

仕送りがあったので家賃や生活費に困ることはなかったけれど、趣味にお金を使えるほどのゆとりはなく、だいぶ身辺も落ち着いてきた秋口に、碧生は人生で初め

てのアルバイトを始めた。ビル清掃のアルバイトで、時給は高くなかったけれど、人付き合いの苦手な碧生には働きやすい職場だった。

友だち付き合いなどもほとんどないまま、貴重な青春を勉強とアルバイトにばかり費やして、大学生活の最初の一年は過ぎていった。

でもそのおかげもあって、二年生に進級するころには、ひとり暮らしには充分すぎるほどの貯金ができていた。単位をしつかり取っていたので毎日大学へ行く必要もなくなり、勉強に追われることもなくなった。

そうしてやつと余裕を手に入れた碧生は、いよいよ本格的に女装にのめりこんでいった。

まずは、欲しかった女ものの服やウィッグ、化粧品などを買い集めることから始めた。それまでもいくら衣類は持っていたものの、いまいちサイズ感もわからず、上下の組み合わせについてもよく感覚がつかめないまま買ったものばかりだったのだ。着てみてもなんだか中途半端で、満足のいく女装はできていなかったのだ。

だから今度は事前に雑誌やネットで入念に調べて、自分の体形に合ったものを選ぶことはもちろん、全体のコーディネートも加味したチョイスをして、違和感のな

衣着こなしになるよう、トップスにボトムス、それにアンダーウェアを揃えていった。多少の買い足しはしているけれど、いま碧生のクローゼットにおさまっているのは、だいたいこのときにまとめて買ったものがほとんどだ。

最初のころは、そうして集めた女ものの服をとつかえひつかえ身に着け、ウィッグをかぶって女の子になりきり、鏡に映った姿を見ながら倒錯的な自慰にふけるだけで満足していた。でも、ほどなくしてメイクを覚えてからは、完璧になった自分の女装姿をひとり楽しんでいることに物足りなさをおぼえ始めた。

（かわいくなつたぼくの姿、誰かに見てもらいたい……）

学園祭でちやほやされたときのような、高揚感と快感。

あの感覚を、いつそうかわいくなつたいま、あらためて味わいたい。

強い欲求を抱いた碧生は、あれこれ考えた末、いわゆる「踊ってみた動画」の投稿に挑戦してみることにした。人気の楽曲に合わせて踊り、それを撮影して動画サイトにアップするというもので、かわいらしいアイドル系の衣装で踊った映像を、週に一本くらいのペースで、ぽつぽつと公開していった。

すると少しずつ再生回数が増えてきて、やがて「かわいい」だの「ハアハア」だ

の「パンツ見えた！」だのというコメントが寄せられるようになり、そのうちに少人数ながらも碧生ファンのコミュニティができるまでになった。

ただ、注目されるのはたまらなくうれしかったけれど、「おっぱい見せて」だとか「処女なの？」といったコメントを見るにつけ、自分は女の子じゃなくて女装なんだということを主張したいという思いが、だんだん大きくなっていった。

欲望を向けられるのは気持ちいい。

でも画面の向こうの見知らぬ人たちは、碧生のことを女の子だと思っているのだ。ありもしない胸や女性器を妄想されるよりも、スカートの下のペニスや平らな胸にこそ欲望を向けてほしい——そんな欲求を抱くようになり、あるとき思いきって女装であることをカミングアウトした。

きつとファンは激減するだろう。だけど、それでも好きでいてくれる人は、ほんとうに碧生の女装姿に興奮している人たちなんだし、たとえ少なくとも、そういう人たちに向けて動画を公開していければ、それでいい。

言ってみればふるいにかけてたわけだが、結果的にはそれでファンが増えることになった。女装告白からの数日のあいだは再生数が極端に落ち込み、コミュニティの

メンバーも半数以上が抜けてしまった。ところがそれからほどなくすると、「レベルの高い男の娘が見られると聞いて」「女の子より興奮するわ」などという新規ファンが増えてきて、いまでは女の子だと思われていたころとは比較にならないほどの再生数を叩き出すまでになっている。

たくさんの人に女装姿を見てもらえて、性欲を向けられている——倒錯した欲びはしかし、さらなる欲求を碧生の中に生み出した。

——もつともつとたくさんの人に見てもらいたい。

——ネット上のファンだけじゃなくて、不特定多数の人たちに見てもらいたい。

——画面越しじゃなくて、生の姿を見てもらいたい。

願いながら、それを想像して痛いくらいに勃起した。

とはいえ、いきなり白昼堂々、大勢の人びとが行き交う街中へ繰り出すなんていうのは、いくらなんでもハードルが高すぎる。

でも、夜中にこっそり外出して、何人かとすれ違いくらいだったら……。

いや、たとえ誰ともすれ違わなくても、女装して外に出るだけだって、きつとすごく気持ちいい。

肌もあらわな姿で歩いて、男だったらまずありえないようなところ——太腿や肩に、直接外の空気が触れたりなんかしたら……。

女装で外に出てみたい。

碧生はもう、それしか考えられなくなっていた。

♂ ♂ ♂

精液で汚れた鏡や床をきれいに拭き終え、碧生はカーテンを少し開いた。

(夏だから七時でもまだかなり明るいなあ……早く暗くなってほしいのに……)

女装で外出したい、という欲望に碧生の心が塗りつぶされたのは、ゆうべのことだった。

まだ丸一日も経っていないのに——それなのに、早くも実行に移そうとしている。ほんとうは、初めての女装外出は計画をすっかり練った上で行なうつもりだった。

でも、

（ちよつと近所を歩くくらい、すぐにだつてできるよね）

ふとそう思つた瞬間から、もういてもたつてもいられなくなつた。

（もし今日うまくいったら、この夏は女装でいろんなどころに出かけてみたいな）

おりしも大学は夏休み。アルバイトも先月で契約満了となり、更新を勧められたが、十分な貯金があつたこともあつて辞退した。

つまり、時間はいくらでもあるのだ。

女装に割く時間は、いくらでも――。

「ああもうっ……またオナニーしたくなつてきちゃつた……」

さつき鏡へ向けて放つたのだから、朝から三回目となる射精だつたのだ。

（これじゃ夜になる前に精液出しきつて、ぐったりしちゃうよ）

そう思いながらも、碧生は辛抱できず、また力をつけ始めた肉竿に手を伸ばしていくのだつた。

第二章 初めての女装露出散歩

玄関のドアを開き、少しだけ顔を出してアパートの廊下を覗く。誰もいない。ごくりと喉を鳴らして一歩足を踏み出し、ためらって、戻す。静かにドアを閉ざし、ミュールから足を抜いて後退。洗面所の電気をつけ、鏡に映った自分の顔を確認する。すっかり女の子に見えることをたしかめて、また玄関へ――。

そんなことをもう、何度も何度も碧生は繰り返している。

時刻は深夜の二時すぎ。電車はとくに終わり、新聞配達走り出すにはまだ早い時間だ。

碧生のアパートは静かな住宅街にあるから、いま外に出ても近所の人に目撃される心配はないだろう。それに、もともとの黒髪とはイメージが違って見えるように茶髪のウィッグをつけているし、薄くだけれどメイクもしている。暗がりでも知り合

いとすれ違ったところで気づかれやしな、とわかってもいた。もとより近所付き合いなんでほとんどないのだから、なおさらだ。

(うう……でもやっぱり、この格好で外に出るのは緊張するなあ……)

胸元と裾にフリルが施されたオフホワイトのキャミソールに、赤いタータンチェックのミニスカート。キャミソールの下は素肌、スカートの下は面積の少ないピンクのショーツ。身に着けているのはそれだけだった。

(ちよつと最初から露出が多すぎるかな……でも夏だし、部屋着でふらっとコンビニに行くだけ、ってふうに見えなくはない……よね?)

自分に言いわけをするけれど、人からどう見えようが、碧生は着替えるつもりなんてなかった。そもそもが、なるべく肌を出せる格好を、と考えてチョイスした服装なのだ。

碧生は荒い呼吸をつきながら、スカート越しに股間を押さえた。手のひらに伝わってくる脈動と、熱。それと、うっすら湿った感触。

(まだ外に出てもないのにこんなになつて……わっ、スカートにまで我慢汁が染みてきちゃった)

太腿を擦り合わせ、腰をゆらめかせる。

「んうう……怖い、けど……」

性欲が緊張を覆い、やがて完全に呑み込んでしまうと、碧生は吹っ切れたように勢いよくドアを開き、アパートの廊下へと踏み出していった。

「ああ……」

生ぬるい夏の夜気が、とたんに全身へまとわりついてくる。

(すごいすごい……これだけでもう気持ちいい……)

大きくあらわになった肩や胸元や腕を、わずかに覗いたおへそを、付け根近くまでむき出しになっている脚を、いちどきに撫でられているような感覚。

びくん、とショーツの内側で肉竿が跳ね上がり、スカートを淫らにふくらませる。

碧生は想像以上の快感に貫かれて、しばらくその場から動けずにいた。

ふるふるると瘦身を震わせ、数分のあいだ、ただただ立ち尽くして夜風に素肌を舐められるままになってしまう。

おっかなびつくりアパートの階段を降り、ようやく道へ踏み出してからも、しばらくは脚の震えが止まらなかった。といってもそれはすでに緊張によるものから、

極度の興奮によるものへと取って代わっている。

(やばっ、これじゃ勃起してるの丸わかりになっちゃう……)

視線を落とすと、スカートの前部を盛り上がらせている肉茎のシルエットが、ぶるん、ぶるんと歩みに合わせて前後左右に揺れ動いている。

「んあっ、すごい……」

スカートに手を差し入れ、向きを変えようとショーツ越しにペニスをつまんだ碧生は、そのあまりの硬さと熱さとに、我知らずうっとりした声を漏らした。

くつきりと浮き出した笠の縁を指先でなぞると、じわりと先端からカウパーが染み出してくる。それを布地越しにすくい上げて亀頭に塗りつけ、吐息を震わせながら勃起の位置を調整する。

「はあっ、はああっ……」

びくんびくん跳ね上がる肉棒を横へ向け、ショーツのゴムで押さえつけようと試みた。

「あ、だめっ……」

しかし股上の浅いショーツのゴムは猛り立つ勃起を固定するにはあまりに頼りな

く、脈打つペニスは簡単にショーツを肌から浮かせてしまう。

横向きにしてあることでさつきよりは目立たないものの、どうしてもふくらみを完全に隠しきることはできそうになかった。

(仕方ない……よね)

暗がりでは見咎められることもないだろう。

あきらめて、ふたたび歩き出した。

いや、あきらめたんじゃない、あえてバレてしまう可能性を自分は残したのかもしれない、と碧生は気がつく。

(今日いきなりはさすがに怖いけど……でも誰かに見てもらいたいっていうのは、やっぱりちよつとあるんだよね……)

あらためて自覚すると、ますます呼吸が荒さを増していく。

勃起は少しも衰えることなくズキズキと疼き続けていて、このまま歩いているだけでそのうち射精してしまうんじゃないかとすら思えるほどだ。

(いじりたい……おち×ちんいじりたい……)

スカートの中ごとペニスを引っつかんで思うさま擦り立てたいのをこらえつつ、

碧生はむき出しの白い太腿に手のひらを這わせる。

(あうう……脚、気持ちいいよ……)

太腿を撫でる手のひら。

手のひらに撫でられる太腿。

どちらの感触もたまらなくて、同時に二カ所から全身へと快感が波及していく。

しっとりした肌は夏の空気にさらされてわずかに汗をにじませ、その湿り気がまたなんとも心地よかった。

右手で太腿を撫でながら歩を進めつつ、碧生は左手を胸元へ持っていった。素肌にぴったりと張りついてしまっているキャミソール越しに、指先でそっと乳首に触れる。

「はうんっ……」

すでにつんと尖って存在を主張していた突起は、軽い刺激を与えただけでも強烈なもどかしさを股間へダイレクトに送り込んでくる。

碧生は内股になって腿を擦り合わせ、ふるふると腰をわななかせた。

じゅわっ、とまた、先走りが尿道口から漏れ出す感覚。

(も、もうだめ……がまんできないっ)

ふらふらした足どりで、碧生は道ばたの電柱に肩を押しつけた。これ以上、とて
も歩けそうにない。

青白い街灯がスポットライトのように照らすもとで、碧生はとうとう本格的に自
慰を始めた。

「ああっ、あっ……」

薄布ごと乳首を指先でつまみ上げ、くりくりと転がしたり、指の腹で押しつぶし
たり。

スカート下の裾から差し入れた指で、ショーツにくっきりと浮き出したペニスのラ
インをなぞったり、先端をくすぐったり。

「んはあっ、だめっ……なのになっ……!」

いくら人通りがないとはいえ、こんな場所でオナニーをするなんてあまりにも危
険すぎる。

頭ではそんなことくらい、もちろんわかっていた。

でも、やめられない。

動き出した欲望は、身体の外へと解き放ってしまわない限り、とても押さえ込めそうにはなかった。

（だったらせめて、早く……）

早く射精して楽になって、家へ帰ろう。

（そのためにはもっと気持ちよくならなくちゃ——）

それが屋外で激しい自慰をするということへの免罪符でしかないことも、碧生は理解していた。

でも、そうとでも自分に言い聞かせなければ、より大きな絶頂を迎えるため、さらに危険な行動に出てしまいかねない。

それくらい、もう碧生の性衝動はふくれ上がってしまったているのだ。

だから、急いで、この場で、存分に、精を放出してしまわなくてはならない。

「ふああっ……」

キヤミソールをめくり上げ、胸をむき出しにする。街灯の光の中、白い肌に赤く色づいている小さな突起が、いやらしく浮かび上がった。

「んちゅっ……」

指先を口に含んで唾液をまぶし、勃起しきった乳首に塗りつける。

「ひあつ、これっ……！」

ぬめりにまみれた牡乳首を、ふわりと夜風が撫でた。体感としては生暖かい風なのに、濡れたしこりにはひやりと冷たく感じられる。ぞくぞくと背筋を快感が這い上がり、思わず肩を震わせた。

「んっ、ふっ、んんっ……」

ぬちぬちと指先で濡れ乳首をこね回しながら、びくびくとしきりに跳ね上がっている。ペニスをショーツごと握りしめる。

（おち×ちん熱い……それにもうぐっしよぐしよ……）

たっぷりと染み出した粘性の体液によって薄布は肉竿にびっちり張りつき、もはやほとんど一体化してしまっていた。棒部分から龟头、陰囊にいたるまで、その形状をくまなく浮かび上がらせて、さながら布製のコンドームのようになっていた。

（これだったら、おち×ちん出さなくても……）

先走りのぬめりを利用して、碧生はショーツに包まれたままの勃起を勢いよく擦り出した。

「んあつ、あつ、すごつ……」

電柱に身をもたせかけたまま、夢中でペニスをしごき上げていく。

（はああつ……ここ外なのに、それに家のすぐ近所なのに……女装して、乳首いじりながらオナニーしちゃってる……）

無機質な街灯に照らし出された自身の白い肢体にうっとり見とれていているうちに、手の動きはどんどん速さを増していく。

「はひっ、ひっ、はっ、はっ、ふっ、ふううっ……」

熱く湿った荒い呼吸が、あらわな胸元に吹きかかる。ぼたり、ぼたりと首筋から汗が垂れて、しなやかな脚のあいだに落ちていった。

（なにこれっ、すっごく気持ちいい……♥ こんなのすぐ出ちゃうっ……！）

手の中で欲棒が硬度を増し、ぐっと身をしならせた。

「あつ、あうあつ、ああつ……」

きゆうつと反り返りそうになる首をどうにかそのままの位置にとどめて、うっすらと浮いた汗にきらめきながらふるふるとやわらかに震える白い内腿を凝視した。

（ああつ、出る出るうっ♥ 外でミニスカート穿いて脚出しまくって、おち×ちん

イツちやうううっ♡)

乳首を転がしていた手のひらで太腿を撫で、ぎゅうつと柔肉を揉み握る。

「はへっ、へっ、へあっ、あっ……♡」

ひとときわ大きく肉竿が反り返り、どくんっ、と亀頭がふくらんだ。

(ああっ、イクっ——♡)

肛門がぎゅつと締まって、お腹に力が入る。太腿にしなやかな筋が浮かび上がり、手の内で淫棒が激しく脈打った。

「んいいいいっ♡」

びゅくんっ——!

先端から第一波が射出されると、じいんと腰の奥が痺れて、脚から力が抜けそうになる。

びゅくんっ、びゆるっ、びゆるるっ、びゅっ、びゅびゅっ……!

「ふあっ♡ あっ♡ やあっ♡ んひっ♡ あっ♡ あああっ……♡」

続けざまに何度も何度も精が打ち放たれ、肉竿が熱い白泥に包まれていく。シヨーツの中に吐き出された牡液は棒部を伝って股布部分に流れ落ち、放出を終えた陰

囊が淫らな水溜まりに浸されていった。

「はあああつ………♥」

精管に残っていた子種をすべて出しきるまで、屋外での射精という未知の快楽に足を釘づけにされて、碧生はその場から動くことができなかつた。

しかし、ぱたっ、ぱたたっ、と下着から染み出した精液が足元にこぼれる音で、はつと我に返る。

（やつ、やばいっ………！）

素早く周囲を見回して誰にも目撃されなかつたことを確認してから、碧生は駆け出した。走りにくい上、そんなことをしてもたいした意味はないのに、腰の位置を低く保ち、すり足気味に逃走する。

転々と白いしずくをこぼしながら家まで辿り着くと、碧生はドアに背をあずけて玄関にへたり込んだ。

「はつ、はあつ、はああつ………」

投げ出した脚のあいだから、むわりと濃厚な精臭が立ちのぼる。見れば、赤いタ―タンチェックのミニスカートの表面にまで、白濁がにじみ出してしまっていた。

「やっちゃった、やっちゃったよ……」

今日は初めてだから、女装姿で近所を一周して戻ってくるだけのつもりだったのに。

それが、すぐ近所の道ばたで、街灯をスポットライトのように浴びながら、素肌をさらして派手な自慰に興じてしまった。

碧生は激しく上下する肩を抱きしめ、ほんのり赤みを帯びた膝小僧をじっと見つめて、ぶるぶると大きく身を震わせる。そして、ごくりと生唾を呑み込み、うつとりと喘いだ。

「はあああっ……気持ちよかったあああ♥」

出したばかりの精液でどろどろのペニス、ひくんと蠢いた。

♂ ♂ ♂

一度してしまうと、すぐに歯止めがきかなくなった。

初めて女装姿で出歩いてからわずか一週間のうちに、すでに碧生は三回も深夜に

家の近所を徘徊していた。

そして五回目となる今夜は、いままででもっとも露出度の高い格好で外を歩いている。

（これ気持ちよすぎ……なんかこのまま歩いてるだけで射精しそう……）

実際、痛いくらいに張りつめたペニスには、家を出てからもうずっと、びくんびくんと休みなく脈を打ち続けているほどだ。

碧生はデニムのショートパンツ越しに、そっと勃起を撫で上げた。

「ふううんっ……♡」

厚手の生地の上からでも、亀頭の形状をはっきりと指先に捉えることができる。サイズが小さくぴっちりしているというのもあるが、それだけあおいの男根が硬く膨張しているということでもある。

住宅街の塀に沿って歩きながら、碧生は胸にも手を伸ばす。薄手の布地にくつきりと浮き出した乳首を、小さく素早く指先を往復させて、何度も弾く。股間を撫でていた手をむき出しの腹部へすべらせると、あらためて露出の多さを実感できた。（こんな下着みたいな格好、女の子だって外でしないよね……）

それを、男である自分がしてしまっている。

碧生はうっとりのみずからの肢体を見下ろした。

上に身に着けているのは、淡いピンクのチュールトップ。筒状になったそれは女性でいえば乳房をちょうど覆い隠すくらいの丈しかなく、デコルテはもちろんのこと、腹部も大きく露出してしまっている。上下に施されたささやかなフリルがかわいらしさを演出しているが、こうして着てみると逆に卑猥な印象を受けてしまうのは、碧生が不埒な欲望のために身に着ているせいだろうか。

下半身を包むのは、白いデニムのショートパンツのみだ。腰で穿くタイプのもので、油断するとお尻の割れ目が見出してしまいそうなほど、極端に着丈が短い。そんなだから腰骨はおろか、おへその下の大部分があらわになってしまっていて、もしペニスを上向けでもしたら、ほとんど丸出し状態になってしまうだろう。いまは横に向けておさめ、ベルトできつく締めつけてあるから、そうそうこぼれてしまうことはないはずだった。

裾は裾で付け根ぎりぎりの部分まで切りつめられていて、しなやかな脚線がくまなくさらけ出されている。そればかりか、うしろから見れば尻たぶがちらちらと見

え隠れしてしまうような大胆なカットで、ほとんどシヨーツ同然といってもいいほどのきわどさだ。そんなだから、よほど小さなものでもないかぎり、下着を穿いてもはみ出してしまうのは確実だった。だから碧生は、思いきって素肌に直穿きしてしまっている。

ほかに着けているのは、長い黒髪のウィッグと顔を隠すためのキャップ、それからラフなサンダルのみ。

つまり、ほぼ小さな布きれ二枚で局部を隠しているだけ、といってもいいような格好だった。

(たままないよお……あーもう、おち×ちゃんやばいつ、ほんとぼくって変態……♥)
すぐにでもいつものように電柱に身を隠して精を放ってしまったが、しかし今夜の碧生には明確な目的がある。

向かう先は、住宅街を抜けたところにある、二十四時間営業のレンタルビデオ店。

これまで誰もいない暗い夜道でのみ行なっていた女装露出を、夜でも明るくて、ほかに人がいる場所でやってみようと思いついたのだ。いや、いままでの刺激では物足りなくなり、いてもたってもいられなくなった、というのが正しいかもしれない

い。

(やっぱりせっかくだったら人に見られたいもん……)

初めて人前に出ていくにしては過激すぎる服装にも思えたが、これまでの深夜徘徊で段階を踏んで露出度を上げてきたということもあって、いまさら露出の少ない服なんてもしかしくって着られなかった。

(ああ、やつとだ……長かったよお……)

ようやく住宅街の終わりまでたどり着くころには、ショートパンツの中が先走りでぐちゃぐちゃになっていた。

夜に女装で歩いて、この広い住宅街を抜けきるなんていうのは、これまでの碧生にはまずできなかったことだ。半ばほどまで進めればいいほうで、それ以上はとてものがまんがでまず、そのへんでオナニーをしてしまっていた。

それが今夜は、初めて端までたどり着くことができた。時間にしたら十分もないくらいだったけれど、碧生にとつては永遠かと思えるような距離だった。

(ただ歩いてきただけなのに、めっちゃくちや興奮した……一回どっかで出しちゃったほうがいいかな……? じゃないともう、おち×ちん限界でだめかも……)

ふーっ、ふーっ、と熱っぽい吐息を漏らしつつ、周囲を見回す。

でも、住宅街を抜けてしまったいま、眼前には広めの道路が長く伸びているばかりで、うまく身を隠せるような場所はなさそうだった。

それに――。

(こ、ここまで来たら、このまま行くしかないよね……！)

通りの反対側には、深夜にもかかわらずまぶしいくらいに明るい、ガラス張りの建物が見えている。

そう、もう目的地であるレンタルビデオ店まで、やってきてしまったのだ。

引き返してひっそり射精をするくらいなら、興奮を保ったままいけるところまでいってしまったおう――碧生は心を決め、ひっそりと静まり返った幅広の道を小走りに横切って、店へと近づいていった。

「あああつ……」

ガラスを通して店内の明るい照明に全身を暴かれ、碧生はがくがくと腰を震わせた。露出した肩が、腕が、お腹が、腰回りが、そして長い脚が、夜の中にはっきりと浮かび上がっている。ライトの色合いも手伝って白い肌がいつそう透き通って輝

き、ひどく艶めかしく見えた。

(なんだか家で見るとよりきれいで……はあああつ、すっごくやらしい……)

とくに脚については、もともとその美しさには男ながらに自信があったけれど、こうして見るといつもとはまた違った趣で、自分のものだというのに激しく欲情してしまう。

青白く浮かんだ内腿の血管をすうつと指でなぞり、そのまま股間へ手を伸ばしそうになるのを、すんでのところでごつとこらえた。

(ここで照らされながらオナニーしたら最高に気持ちいいだろうけど、カメラついでるもんね、きつと……)

そういう問題でもないだろうが、とにかく碧生は本来の目的のため、勃起を疼かせながら店内へと入っていった。

「いらっしやいませー」

ごく自然に声をかけられただけなのに、ぞくりと背中がざわめいた。

(ああ、すっごい……♥ こんなに明るいところでぼくのエッチな女装姿、人に見られちゃってるよ……♥)

店員の反応や視線が気にはなったものの、顔を向ける勇氣は出ず、碧生はそそくさと店の奥へと向かう。

(はううっ♥ クーラーの風がありえないところに当たってる……♥)

男として来店したときにはまず触れないような素肌のあちこちを、少し寒いくらいの冷風がいつせいに撫でていく。

「んううう……♥」

ぶるぶるぶるっ、と全身がわなないた。寒さのためではない。あらためて自分の大胆な服装を自覚して、あまりにも大きな興奮と快感が押し寄せてきたせいだ。

(あああっ……♥ 気持ちいいっ、気持ちいいよおっ♥ すっごく気持ちいいっ♥) 歩きながらさりげなく、身体の両脇に伸ばした手で太腿を撫で回す。もっちりした柔肉の冷ややかな感触に、ショートパンツの前部が何度も何度もふくらんだ。

(ああっ、やばいやばいっ♥ ひ、人がっ、人がいるよおっ……♥)

新作DVDの棚の前に、若い男たちの姿があった。ふたりしてしゃがみ込み、熱心にパッケージの裏を見つめている。

(と、通っちゃうよ？ うしろ通っちゃうよ？)

彼らに言っているのか、自分に確認しているのか、もはやよくわからない。

「んっ……」

音が聞こえてしまいそうなほどに鼓動を大きく打ち鳴らしながら、彼らの背後をゆっくりと進んでいく。

「これはちよつと微妙かなあ。あつちのほうが——」

連れに向かつて話していた男が、ぴたりとそこで言葉を止める。横目で見ると、一瞬だけ視線が交わった。

（わあああつ！ め、目が合っちゃった！ ど、どどどうしよ……）

緊張が極限に達して足を進められなくなり、その場にうずくまる。男たちに背を向ける格好で、震える手で取り上げたDVDのパッケージを眺めるふりをした。

（さ、逆さに取っちゃった……）

わたわたと向きを直して視線を落とすが、文字なんて少しも頭に入っていない。

（ぼ、ぼくのこと見てたよね？ なんかちよつと驚いてた顔だったけど、じよ、女装だつてバレちゃった？ こんないやらしいカッコして、変態だつて思われちゃったかな……？）

そんなふう想像したとたん、じゅわっと先走りがショートパンツに染み出した。
（い、いま……こっち見てる？ 背中……それにお尻のきわどいところまで見えちゃってるよね……？）

意識を向けてみると、背中の下半分からお尻の上部にかけてを、クーラーの冷気が舐めているのを感じる。しゃがんだことで生地が引っぱられて、少しばかりお尻の割れ目が露出してしまっているようだった。

（やばいやばいやばい……）

身じろぎもせず、じっと足元を見つめる。すると、大きく開いた内腿の白さやふつくりとふくれ上がったショートパンツの股間がまっすぐ目に飛び込んできて、かああっと全身が熱くなる。

「はっ、はあっ……」

吐息が震え、だらだらと首筋を汗が流れていく。

「きゅ、旧作のほうも見てみるか」

うしろで男の一方が言った。それをきっかけに、固まっていた空気がゆるりと流れ出し、男たちは碧生の背後を通りすぎていった。目の端に映ったふたりの足が棚

の角を曲がって消えると、碧生はぺたんとその場にお尻をついてしまった。

(こ、怖かったあ……)

震える足でなんとか立ち上がり、のろのろと店の出入り口へ向かう。

(変態がいるって通報されたらたいへんだし、今日はもう帰ったほうがいいよね……)

足を引きずるようにして歩いてるときだった。

「——あの子やばくなかった？」

通りがかかった棚の反対側から、さっきの男たちのものらしい話し声が漏れ聞こえてきた。

「めっちゃケツ見えてたよな。エツロかったなく。ちらっと顔も見えたけど、ふつーにかわいかったしさ」

「映画やめてAV借りる？　なんか露出ものとか見たいわ」

「わかる。あの子も露出狂っぽい感じだったもんな」

「こんな夜中にあの格好ってふつうじゃないよな。男と一緒に来てるんだらうけど

「ん」

「じゃなかったら、さすがにあぶなすぎんだろ」

興奮を隠しもしないふたりの会話に、碧生は思わず足を止めていた。

(ああああっ……)

棚に手をかけて、きゆうつと太腿を閉じ合わせる。ショートパンツの内側で痛いくらいにペニスが反り返っていた。

(いやらしい目で見てたんだ、ぼくのこと……露出狂だって気づかれちゃってるし、もう、もう……)

腰をくねらせて、碧生は吐息を乱した。

「ふーっ♥ ふーっ♥ ふーっ……♥」

あらわな肌を見られたばかりか、あからさまな欲望まで向けられたのだと実感したとたん、ぞくぞくと凶暴な快感が腰の奥底から突き上げてくる。

(も、もうだめえっ……は、早くお店出て、どっかの物陰で射精したいっ……)

棚に手をつきながら、ゆっくりゆっくり歩を進める。気持ちは急いでいるのに膝が笑って言うことを聞かず、そんなふうにししか歩けないのが狂おしいほどどかしい。

ようやく店の出入り口が見えてきて、極限まで高まった射精への欲求に歩みを必死に速めかけたとき――。

不意に誰かが真横に姿を現した。

「ひうっ――」

思わず怯んで肩をすくめるが、

「あ、なんだ……」

それが鏡に映った自分自身だと気づいて、ほっと安堵する。

そうしてあらためて目を向けた瞬間、

（わっ、すっ、すっごい……♡）

碧生は鏡に映った自分の姿に魅入られ、動けなくなってしまった。

防犯のために設置されたものなのだろう。太い柱の全面に貼られた大きな鏡が、碧生の頭から爪先までを、明るい照明のもと、すべて鮮明に映し出していた。

（ぜんぶ映ってる……♡ ああああっ♡ 碧生のぜんぶ、うつつちゃってるうっ♡）

華奢な肩。

くつきりと浮き出した鎖骨。

ほっそりとした長い腕。

大きく開いた平たい胸元。

ぽつちりとチューブトップに浮いたふたつの突起。

薄いお腹に細い腰。

たてに伸びたきれいなおへそ。

鋭角を描く左右の腰骨。

ペニスがこぼれそうなほどぎりぎりまで露出した下腹部。

横向けた肉竿の形状をうつつすらと浮かばせた白いショートパンツ。

付け根からサンダルの爪先まで、すらりと伸びた脚の全貌。

そして、頬を赤く染め、潤んだ瞳をとろんと細めて、濡れた唇をだらしなく緩め

ている、もはや猥褻としか言いようのない顔。

(いやらしい……♥　こんなのいやらしすぎるからあ……♥)

そのままペニスを引きずり出して思いつきりしごきたくなるのを、ぎゅつと両手を握りしめて必死にこらえる。

(早くお店から出てオナニーしたい……しなくっちゃ……)

そう思いはするものの、鏡に映った自分の卑猥な姿から目が離せない。

(はあああ♥ ぼくの身体えつちすぎるよお♥ このまま見ながらイキたいっ、出したいよおっ……♥)

もどかしさに肢体をくねらせ、鏡に向かってぐつと腰を突き出したときだった。

「へあああっ♥」

強烈な快感が亀頭で弾け、がくと背中が反り返る。

(はああっ♥ なにいつ♥ なあにいいいつ♥)

かくん、かくんと腰が震え、そのたびに駆け抜ける淫悦。

(そ、そっか……シヨパンが窮屈なのに勃起しまくってるから生地を擦れ、てええっ♥)

ぱんぱんに張りつめた亀頭への摩擦に、碧生は悶絶した。

大量のカウパーを染み込ませたシヨトパンツは、ぐつしよりと濡れてびちびちに縮んでしまっている。これまでも多少の摩擦はあったし、それなりの気持ちよさもあった。でも、いまのはレベルが違いすぎる。ぴったりと張りついた布地がペニス全体の振幅こそ小さくしてはいるものの、亀頭周辺にわだかまった粘っこい先

走りが先端部の動きだけ特別なめらかなものにしていて、快感をそこばかりに集中させて与えてくるのだ。

「んあっ♡ はっ♡ やっ♡ だめっ……♡」

肉竿が跳ねるたび、根元はきつく締めつけられたまま、先端だけがぬるりぬるりとデニムの裏地に擦れる。なんとかこらえてその場を去ろうとするのだが、摩擦を受けると勃起が跳ね起き、そうすると苛烈な刺激が先端部を襲って、逃げる間もなくまた大きく脈打ち、容赦なく亀頭が擦られて、さらに続けてペニスが反って――

「あへっ♡ へううっ♡ らめっ♡ もうむりっ……♡」

いっそのこと座り込んでしまえばよかったのだ。そうすればペニスの位置を変えるなりして、快樂の連鎖を止めることもできただろう。

しかし碧生は動けなかった。

(はあっ♡ イキそうっ♡ あおいイキそうな顔してるっ♡ おち×ちんっ♡ おち×ちんイクうっ♡ ショーパンでコかれてイッちやうよおおっ♡)

鏡に映る絶頂寸前の自身の姿から、目を離すことができなかったのだ。

〈つづきは製品版でお楽しみください〉